

遠藤新の卒業論文 “Description on City Hotel Design”

—1914年に描いた理想のホテルの理念と背景—

Arata Endo's Graduation thesis “Description on City Hotel Design”

—The concept and the background of the ideal hotel in 1914—

黒田 智子 武庫川女子大学 教授

Tomoko Kuroda

Professor,
Mukogawa Women's University

概要

建築家・遠藤新（1889-1951）の建築論の原点として、東京帝国大学建築学科の卒業論文“Description on City Hotel Design”（シティホテル設計についての解説、1914）を対象としている。論文（英文手書き）の構成と添付図面（手描きインキング仕上げ）を整理し、その背景と特徴を考察する。また、同時に取り組んだ卒業設計‘City Hotel’（1914）、翌年読売新聞発表の「東京停車場と感想」（1915.1.27-31）との関係を考察する。

背景として、1911（明治44）年から10年間の同学科の卒業論文の表題の変化、後に建築の芸術性について論じた遠藤と対照的に「建築非芸術論」を標榜した同窓で同世代の野田俊彦（1891-1929）、当時の講座、指導教官などを取り上げている。

それを前提に、遠藤が、帝国ホテル新館（後のライト館）を自ら設計することを想定し卒業論文に取り組んだことを、遠藤自身による敷地の選定、機能分析、既存ホテルの調査などから明らかにした。また、序章を翻訳し、宿泊客の生活に寄り添った理想の環境の提供を設計理念とした過程を明らかにした。同時に、具体的な情報を提供した林愛作、恩師としての土井晩翠と伊東忠太、さらにキリスト教などとの関係について考察する。

はじめに

建築家・遠藤新（1889-1951）の卒業論文“Description on City Hotel Design¹⁾”（1914）を、遠藤の母校である東京大学（当時は東京帝国大学）建築学科図書館で閲覧することができた。100年以上前の資料であるため、貴重図書としての閲覧である。卒業設計‘City Hotel’（1914）は、『建築家遠藤新作品集²⁾』（1991）に掲載されている。しかし、卒業論文の掲載は無く、表題・内容ともに確認できないままになっていた。

今回、東大図書館に閲覧を願い出た直接の切掛けは、『アルス建築大講座 第1-17巻³⁾』（1927-1929）の中に「建築論」という表題を共有して遠藤を含む5人⁴⁾の建築家が寄稿していたことに始まる。「建築とは何か」、「それは芸術なのか」、「（建築が芸術であるとすれば）建築とはどんな芸術なのか」という建築にとって本質的かつ基本的といえる問いに対して、5人がそれぞれの考えを述べている。表題だけでなく建築についての根本的な問いを共有して複数で論じる編集方針もさることなが

ら、そこで論じられた内容が、近代建築史に占める位置にも興味が湧いた。

5つの「建築論」をみると、3人の建築家が、建築は芸術であるという立場をとる。その中で特に遠藤は、実作品の設計経験を通じて建築の芸術性を論じているただ一人の建築家である。

対照的に建築は芸術ではないとし、「建築非芸術論⁵⁾」（1915）で知られた野田俊彦（1891-1929）は、自らの「建築論」（1928）においても、その立場には変わりがないと述べている。野田の「建築非芸術論」は、自らの卒業論文「鉄筋混凝土構造と建築様式」（1915）を、建築学会の『建築雑誌』掲載のために推敲したものである。したがって、卒業研究が野田の「建築論」の原点といえる。野田は遠藤の1年後に帝国大学を卒業しており、二人はほぼ同世代であった。

一方、遠藤は、卒業の翌年、「東京停車場と感想⁶⁾」（1915.1.27-31）を『読売新聞』誌上に5日間にわたり連載し、東京駅の設計のあり方を根本から批判した。竣工間もない話題建築であり、建築界の重鎮であった辰野金吾（1854-1919）の設計であったことを考え合わせると、社会の反響は、野田の「建築非芸術論」よりも多く見積もられたと推察される。その結果はともかく、同世代の野田と対比した場合、遠藤の卒業論文と「東京停車場の感想」との関係、さらに遠藤自身の「建築論」における建築についての考えの共通性に興味が向かう。

遠藤は、近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライト（1867-1959）の弟子として語られることが多い。帝国ホテルの基本設計に携わった1918（大正7）年からホテルが竣工した1923（大正12）年までの5年間、通称ライト館実現のために献身した。しかしながら、遠藤が卒業論文を書き上げたのは、1914（大正3）年であるから、ライトのもとで設計に携わる4年前である。そこには、ライトに出会う以前の遠藤の「建築論」の原点が示されているのではないだろうか。

1. 卒業論文の構成と卒業設計との関係

遠藤新は、1889（明治22）年生まれなので、卒業した1914（大正3）年には25歳であった。当時は、7月卒業であったから、現在の修士課程を終えてしばらく経つくらいの年齢である。卒業論文からは、若き日の建築家の真摯な姿勢が感じられる。

卒業論文は、333×211mm（B4より少し小さめ）の罫線に

キーワード：東京帝国大学建築学科、伊東忠太、林愛作、土井晩翠、帝国ホテル

記述され、全篇手書き英文(図1)による。ところどころドイツ語やフランス語も散見され、参照した資料の国際性やそれに対応した教養が感じられる。一方、その字体は急いで書いたためか判読が難しい箇所が多く、明らかな誤字・脱字や構文における文法的な誤りが見られる。合わせて閲覧した野田俊彦の卒業論文は、寸法・装丁は同じであるが、和文楷書体で読みやすく記述されており、対照的である。

論文は、文章のみであれば40頁程度である。本文の間と巻末に、トレーシングペーパーに手描きインキング仕上げの参考図面(図2)が、本文を上回る43頁にわたり添付されている。おそらく欧米の専門誌からトレースしたと思われる。当時の最新ホテルを参照している点が注目される。卒業論文の本文中に挿入され、ホテル名が読み取れた7事例のうち5事例が1912年以降、最も古いもので1903年の完成であった。

目次、参考文献、注釈などは省略されている。その点は、野田の論文も同様で「要領-索引」と名づけたものを末尾に付すのみだった。卒業論文の形式として特に義務付けられていなかったのであろう。

表題については、表紙では“City Hotel”だが、中表紙では、“Description on City Hotel Design”(シティホテル設計について

の解説)となっており、一致していない。本稿では後者を表題とみなすことにする。遠藤の卒業論文は自らの卒業設計“City Hotel”の解説(description)であることが一見して明らかだからである。東京帝国大学建築学科では、伝統的に卒業論文と卒業設計との両方に取り組む。もちろん、卒業設計とは別の対象を決めて卒業論文を書く選択肢もあった。例えば、遠藤の17年先輩にあたる武田五一(1872-1938)の場合、卒業論文は『茶室建築』(1897)、卒業設計は“Academy of Music and Concert Hall”(コンサートホールを持つ音楽学校、1897)である。卒業論文の内容を、後には「建築非芸術論」という表題に端的に示した野田俊彦の場合、卒業設計は、“Design for a Theater”(劇場の設計、1915)である。後年、野田は、自らの設計に対して、湧き起こる美的表現を抑えきれず、それを後悔したと述べている⁷⁾。自己の内面の表現は、野田にとって芸術に含まれているため、建築は芸術ではないとする自らの主張と矛盾するからである。つまり、やり遂げたかどうかは別にして、野田にとって、卒業論文は理念または方法、卒業設計はその実践という関係だったと捉えられる。遠藤の卒業論文の場合、建築の形態や材料の説明だけに終わらない独自の理念として何が記されているのかを、考察の視点としたい。

“Description on City Hotel Design”の構成について、各章の頁数を挿入図・添付図面の頁数と合わせて表1に示す。

2. 建築学科における教育環境

2-1 1915(大正4)年以降の卒業論文の表題の変化

卒業論文の英文表記は、1879(明治12)年卒業の第一期生以来の伝統である。明治政府が招聘したお雇い外国人によって高等教育の道を開いた近代日本にあつては、必然的なことだった。英語やドイツ語などの語学に堪能でなければ、外国人による講義は聴き取ることさえもできない。また、教官も学生の提出する成果を評価できない。造家学科に始まるジョサイア・コンド

表1 遠藤新の卒業論文の構成

	ページ数	図掲載 ページ数	備考
中表紙	1		審査者3名のサイン
preface	4	0	
On the Site	3	1	配置図(着彩)挿入
Elevation	13	2	立面図のスケッチ、装飾を含む
On Plannig	31	9	平面図7(着彩1)、断面図1、ダイアグラム1
参考図		31	専門誌からのトレースと考えられる
本文合計	40	43	目次・参考文献・注釈無

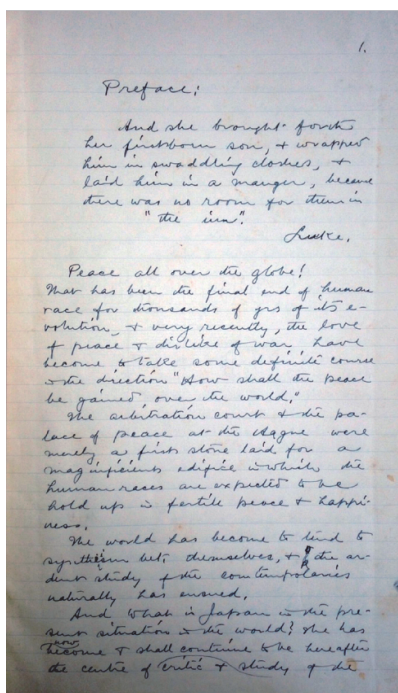


図1 英文手書きによる卒業論文(序章の1頁)

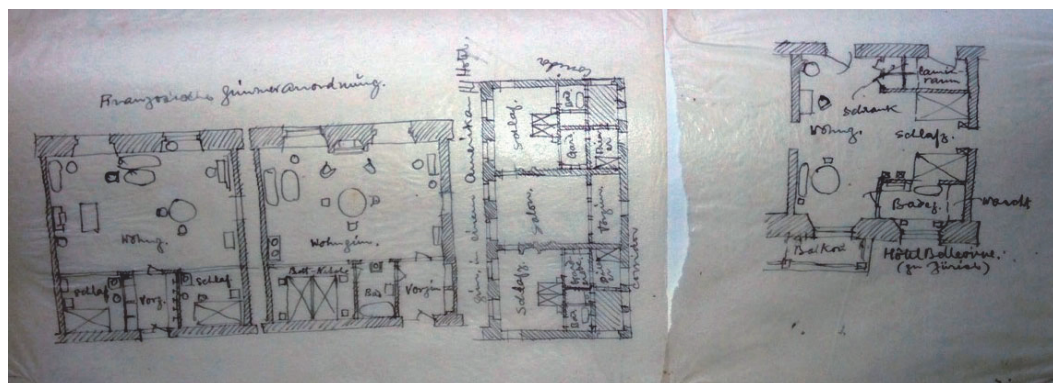


図2 卒業論文に添付された手描き平面図の事例(室名はドイツ語表記)

ル (Josiah Conde, 1852-1920) の薫陶は、辰野金吾に受け継がれ、遠藤の在学時には塚本靖 (1869-1937) が継いでいた。遠藤の英文による卒業論文はその系譜に沿うと考えられる。

東大建築学科図書館における卒業論文の一覧表によると、遠藤が在学した4年間において、和文の表題は少ない。もちろん表題が英文だからといって、内容も英文とは限らないであろうし、本稿では、それについてすべて確認したわけではない。しかしながら、翌年の1915(大正4)年を境に、表題はすべて和文となるのは明瞭な変化である。また共通の表題が増え、特に1917(大正6)年から1920(大正9)年までは、卒業生全員が同一の表題に取り組んでいる。なお、同一の表題は、1921年以降見られなくなり、第二次世界大戦下においてもそれは変わらない。1911(明治44)年から1920(大正9)年までの10年間の卒業論文の表題を整理し表2に示す。

1915年以降の表題の変化は、当時の建築学科に設けられた4講座の教授陣の合意に依ると考えられる。特に、この年新しく設立した構造系の講座を教授として率いることになった佐野利器 (1880-1956) の意見が、少なからず影響したと考えられる。

英文から和文への移行は、佐野が、日本の発展には欧米文化の受容ではなく、技術革新こそが必要だという立場をとったことと矛盾しない。同時に、コンドル以来の教育の方向性の転換を示すと捉えられる。一方、同一表題の共有は、自由な選択肢が無くなる反面、各論文の視点の明確さや思考の深さなどが比較しやすくなるという長所がある。当時、建築についての関心が多様化したのであれば、それらを包摂しつつ、評価の視点や指標を適切に設定できるかどうか、同一表題の有効性の決め手となるだろう。

1915年から1920年までの表題は、構造・構法と様式・表現、都市と建築などについてで、包括的だといえる。ただし、

評価の視点や指標については、本稿では未確認である。なお、表題の共有が、『アルス建築大講座』の5つの「建築論」と共通する方式であることを付記しておきたい。

2-2 審査した教官と講座

さて、自ら選んだ表題で卒業論文に取り組める最後の学生だった遠藤の卒業時の成績は、6番⁸⁾であったという。表2のように建築学科の同期は13名であったから、ほぼ中間に位置する順位である。特に悪い成績とは言えないと思うが、一番で入学⁹⁾し、設計・論文共に相応の努力の跡がうかがえる遠藤であれば、その評価を残念に感じたかも知れない。

卒業設計についてみると、同期生の中での遠藤には、作品の完成度の高低において特に目立ったものは感じられなかった。しかしながら、遠藤は、断面図の中に、家具・照明・置物・内装などを描き込んで、建築だけでなくインテリアまでデザインしている点が注目される(図3)。学年を跨いでも、そのような作品は案外見当たらないからである。多くの学生が、様式、装飾、ロゴによって個性と完成度を競い合う中で、遠藤の断面図は、他には無い独自性を示していると思う。

卒業論文については、その中表紙の右下に、3名のサインが記されている。審査した教官のものであろう。塚本、関野、佐野と読める(図4)。それぞれ、塚本靖、関野貞 (1868-1935)、佐野利器と考えられる。1914年当時は3人とも助教授で、佐野は翌年、塚本と関野は1920(大正9)年、教授に就任する。

前述のように、塚本は、コンドルから辰野へと受け継がれた西洋建築史および設計の講座に所属したと考えられる。その系譜は、共感や反発はともかく、教育環境として、カリキュラムや授業内容だけでなく、建築そのものによる影響を及ぼしているといえるだろう。例えば、遠藤が、恩師や学友と共に4年間を過ごした建築学科の学舎 (1888) は、すでに退官して10年以上たっていた辰野金吾の設計¹⁰⁾による。現役で指導に当たっていた塚本の場合は、建築の装飾・意匠だけでなく、海外の美術・工芸への造詣も深かったという。インテリアを描いた遠藤の断面図にどのように影響したか興味を持たれる。

関野は、奈良の古建築や平城京址など日本建築史の権威として知られる教授である。多くのスペースがあるのに、関野のサインは、控えめに塚本の下に記されているので、主たる審査者ではなかったのかもしれない。

一方、日本および東洋の建築史の権威として建築学科を率

表2 東京帝国大学建築学科卒業論文の表題の変化

年代	卒業生数 (論文数)	表題			備考
		英文	和文	同じ表題	
1911	14	13	1	0	遠藤新入学
1912	16	15	1	0	
1913	19	17	2	0	
1914	13	13	0	0	遠藤新卒業
1915	12	0	12	5	「鉄筋混泥土構造と建築構式」
1916	17	0	17	14, 2	同上、「和風住宅(如何にして耐火ならしむるか)」
1917	12	0	12	12	「我が国将来の住宅建築」
1918	14	0	14	14	「都市と建築」
1919	16	0	16	16	「我が国将来の住宅建築」
1920	16	0	16	16	「都市と建築」

*同じ表題を備考欄「」に示す

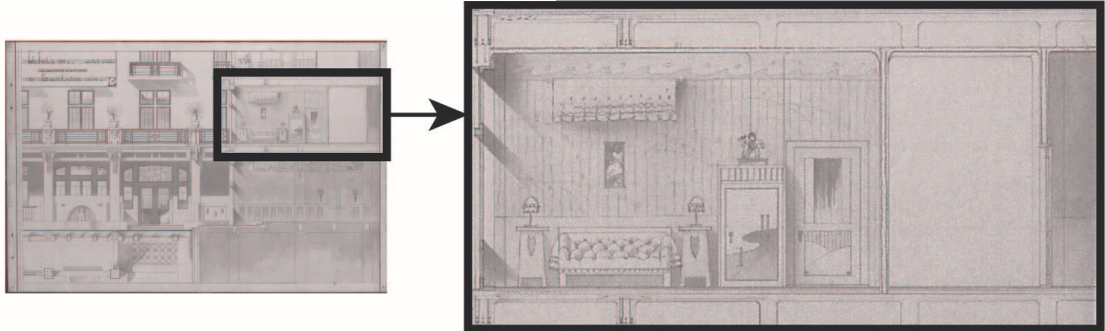


図3 卒業設計における断面図および客室のインテリア

いていた伊東忠太のサインが記されておらず、理由も確認できなかった。卒業後、遠藤が1年間勤務した明治神宮造営局で、伊東は神社奉仕調査会委員（および調査会事務嘱託）¹¹⁾を務めていた。また、それ以前から明治神宮のあるべき姿を積極的に新聞誌上で論じていた。維新直後の神仏分離令から45年、崩御後の天皇をどのように祀るべきかについて先例は無かった。新時代の表現形態も含めヴィジョンを打ち出す時期だったと考えられる。その伊東が、遠藤に「東京停車場と感想」を新聞発表するのを勧めたとされる¹²⁾。新聞社への人脈があるだけでなく、原稿の内容を十分に認めていたからこそだと考えられる。したがって、恩師としての影響は決して小さくなかったのではないかと思う。

伊東は、卒業論文で「建築哲学」（1892）の表題を掲げ、「建築とは何か」という根本命題に取り組んだ。和文しかも毛筆楷書体で、7冊に分冊され、英文による卒業論文の間にあって異彩を放つ。日本建築の伝統の所在を世界史的視野から解こうとする伊東の原点が示されていると思う。同時に、「建築哲学」から36年後、『アルス建築大講座』の5つの「建築論」の共通命題「建築とは何か」「建築は芸術なのか」に繋がる。その思考の水脈の起点として位置づけられるのではないかと思う。遠藤の卒業から遡る22年前、すでにこの根本的な問いを発する先輩がおり、主任教授として教鞭をとり、卒業後も助言していたことが注目される。

佐野利器は、遠藤が卒業した翌年教授に就任し、前述のように鉄骨および鉄筋コンクリート構造の講座を率いる。耐震、防火・防災の観点から建築界に大きな影響力を持つに至り、いわゆる「構造派」の中心となった。また、野田が「建築非芸術論」を『建築雑誌』に発表したのは、当時佐野の下にあった内田祥三（1885-1972）の勧めによるという。野田の論点は、『建築雑誌』上で論議を呼ぶことになるが、すでにそのもととなる卒業論文が、コンドル以来歴史・意匠を重んじて来た建築学科内で物議をかもししていたという¹³⁾。遠藤と野田の誌上发表の経緯を考え併せると、近代日本の建築学を創り上げた教官たちと少人数の学生という教育環境は、独立した価値観についての直接・間接の密度の高いコミュニケーションの場であり、それは、卒業後も持ち越されるものだったといえるだろう。

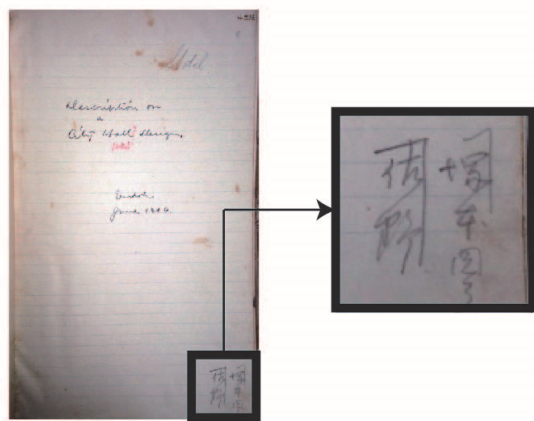


図4 卒業論文の中表紙と指導教官のサイン

3. 卒業論文の内容

3-1 敷地および与条件の分析

遠藤新の卒業論文“Description on City Hotel Design”は、先にみた章立て、資料などから、卒業設計“City Hotel”のために自らがとった考え方と、設計のための事前調査をまとめたものと捉えることができる。その意味では、翌1915（大正4）年、『読売新聞』誌上に連載した「東京停車場と感想」との直接の関係は無いと判断できる。同年、『建築雑誌』発表の「建築非芸術論」が自らの卒業論文を推したものであった野田俊彦の場合とは、明らかに異なっている。

しかしながら、“Description on City Hotel Design”と「東京停車場と感想」には基盤となる条件や考え方に共通性がある。例えば、遠藤は、自らのホテルの敷地を、和田倉濠（東京都千代田区皇居外苑）に面して、現在、日本生命丸の内ガーデンタワーが建つ場所を選んでいる。配置図から、敷地を検討する時点でのホテルの名称は、「ミカドホテル」であることが分かる。遠藤の配置図をもとに、ミカドホテルと和田倉濠の位置関係を図5に示す。遠藤が選んだ敷地は、東京駅から400m以内の距離にあり、両者はかなり近い。もし、自らの作品の敷地条件を地域・地区のスケールで考えるならば、東京駅と共通することが多かったといえるだろう。したがって、遠藤が、敷地条件を活かしたホテルを志向したとすれば、そのような観点から東京駅を評価するのは自然で、十分可能でもあると思う。実際、「東京停車場と感想」連載の初日には、建築としての東京駅とその周辺地域とがそれぞれに持つ社会的役割や機能、そこから醸し出る雰囲気について、自分なりの見解を示している¹⁴⁾。ミカドホテル、東京駅、帝国ホテルの位置関係を図6に示す。



図5 卒業論文におけるホテルの配置図（部分）



図6 ミカドホテル・東京駅・帝国ホテルの位置関係

また、遠藤は、自分なら新しい帝国ホテルのためにどのような建築を設計するか、相当具体的に想定して卒業設計に取り組んだことが、図2にみられるような図表や図面から確認できる。それらは、遠藤自身が作成したものであろうが、もともとなる情報は、林愛作の提供によると考えられる。

遠藤が、大学の授業の一環として帝国ホテルを見学し、支配人林愛作に会ったのは、卒業の前年、1913(大正2)年である¹⁵⁾。この時、遠藤は、フランク・ロイド・ライトが、帝国ホテル新館の設計のために林に会いに来ていたことを知る。ライトは、遠藤にとってすでに憧れの建築家であった。そのため遠藤はホテルについて熱心に質問し、そのことが林の印象に残ったとされる。

もし、設計をライトに依頼するとすると、その現場では、日本語が分からないライトと、英語が分からない職人たちとの架け橋になるような人材が必要であろう。また、もし、日本にこれまでなかったようなホテルを目指すのならば、その分不確定な要因も多くなる。英語だけでなく、ホテル建築の設計について理解力を示し、知性と熱意と覚悟を合わせもった健康な若者が理想であろう。遠藤は、東京帝国大学建築学科の学生として、まさにそれらの条件を満たしていたといえよう。したがって、林にとって、遠藤は、初対面から好感度が高かったと推察される。林は、この初対面の出会いと、翌年の遠藤の卒業とを共に記録にのこしている¹⁶⁾。

林は、規模を拡大し登り坂にあった山中商会を辞し、1909(明治42)年に帝国ホテルに着任した。林の支配人としての任務は、ホテル経営の立て直しに加え、規模・設備共に限界が見えてきた本館を新しく建て替えることであった。林は、その立場上、新ホテル計画の進捗に関して、部外者の遠藤にありのままを話すことはできなかつたと思う。しかしながら、新ホテルの役割や意味を真摯に把握し理解しようとしていた遠藤に対し、請われれば自らの支配人としての仕事について説明することは、むしろ誇りであり喜びであったと想像される。そうであるならば、遠藤が卒業論文に必要とした海外のホテルについての情報は、出来るだけ提供したであろう。特に、帝国ホテル着任から4年、遠藤に会った当時の林は、ホテル運営の改革のため次々と新たな試みを実践し成功を修め、辣腕支配人として知られていた。

したがって、もし、理想的なホテルを目指すなら、林の実務こそは、遠藤にとって、そのまま建築の計画・設計に反映すべきものであろう。遠藤は、卒業論文の‘On Planning’(平面図について)の章に、図7のようなホテルの機能関係図を挿入している。複雑なホテルの業務や、機能相互の関係を整理したものである。中心の円に記入された‘management’は、すべての機能を統括するための最上位の機能といえる。そして、それを実践するのは支配人(manager)つまり他ならぬ林である。

また、林は、やはり立場上、世界のホテルの最新動向を押さえておくため、少なくとも欧米のホテル情報を掲載した雑誌などを、資料として手もとにおいていたと考えられる。遠藤がトレースした既存ホテルの平面図には、前述のように1912年

以降に完成したものが少なくない。出典の確認は今後の課題であるが、1914年の時点に立てば、まさに最新情報といえる。

遠藤は、ホテル設計のために行った機能分析と既存ホテルの平面計画の検討に、最も多くの頁数を割いている。(表2)その姿勢は、昭和初期に提示された建築計画学を先取りしているように思われ注目される。同時に、卒業の翌年、「東京停車場と感想」において一般客(公衆)用と皇室(帝室)用の動線計画の問題点を指摘する¹⁷⁾に十分な判断力を培ったと考えられる。その他にも、遠藤の卒業論文は、対象を東京駅に換えた場合も、なお有効な評価の視点を内包していると推察される。それこそが、「東京停車場と感想」を、伊東忠太が新聞発表を勧めるほどの水準に至らせた理由ではないかと思う。

では、ライトの理念・方法についてはどうだろうか。遠藤が、はじめてライトの存在を知ったのは、雑誌を通じて¹⁸⁾だったとされる。強い感銘を受け、卒業後は、ライトのもとで建築を学びたいと思ったという。新帝国ホテルの設計者と知り、熱心に質問をして林の印象に残ったことは前述の通りである。遠藤が帝国大学に入学した年、近代建築史に大きな影響を与えたとされる“Ausgeführte Bauten und Entwürfe von Frank Lloyd Wright”(1911, リトグラフによる大判の豪華な作品集、通称 Wasmuth Portfolio, ヴァスムート本など)および“Ausgeführte Bauten”(1910, 通常の印刷による作品集, ライトは Sonderhefte と呼んでいた)はすでに出版されていた。当時の帝国大学が、欧米の新しい情報を積極的に取り入れていることからすると、それらを目にしなかつたのは不思議である。また、帝国ホテルの新館設計をめぐる林とライトの関係からすると、二つの作品集は、少なくとも林の手元には届けられていたと推察されるのである。

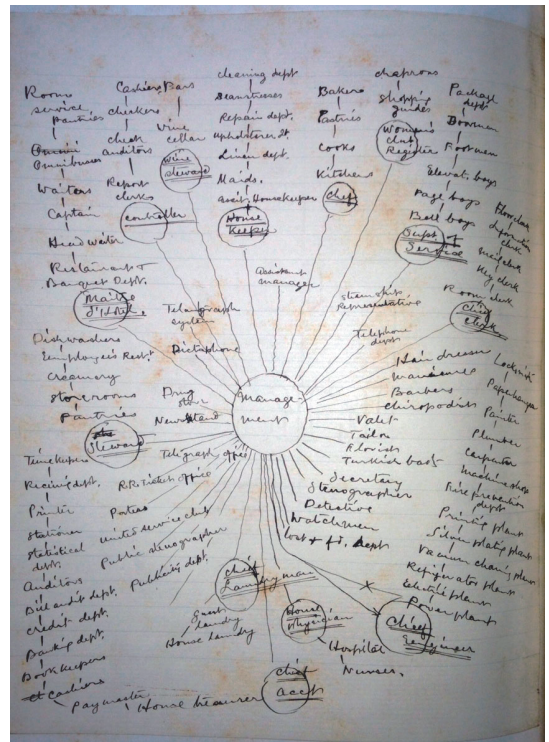


図7 卒業論文に添付されたホテル機能関係図
(中央の円内は ‘management’ と読み取れる)

遠藤在学中に国内で発行された建築関係の専門誌の中に、現時点で、ライトの紹介記事を見つけることが出来なかった。一方、アメリカの雑誌については、いくつかの可能性¹⁹⁾があると思う。例えば、1908年出版の“Architectural Record”(1908.8)誌の“In the Cause of Architecture”(1908)である。ライトが寄稿し、多くの作品が掲載されている。また、ヨーロッパとは別にアメリカでも出版された“Ausgeführte Bauten und Entwürfe von Frank Lloyd Wright”(1911)のために宣伝用に作成された7頁のパンフレットがあり、やはりライトが文章を準備したという。それらと卒業論文の対比からライトの影響の有無を確認することが可能だと考えられる。

もし、遠藤が“In the Cause of Architecture”(1908)を目にしたとすれば、卒業設計においてライトの作品を参照し、ライト風のホテルを提案することも可能だったのではないかと思う。しかしながら、遠藤は、そうはしていない。図3のように、卒業設計のホテルはウィーン分離派風の外観で、インテリアには分離派に加え、Ch. R.マッキントッシュ風の家具やジャポニズム風の置物などが配置されている。ライトではなく、むしろライトと同世代の世紀転換期のウィーンやグラスゴウの建築家の作風に沿うものではないかと思う。

なお、1909年、ライトが自らの作品集を出版するために、初めてベルリンのヴァスマート社を訪れた際、「アメリカのオルブリッヒ」と紹介された²⁰⁾という。ドイツでは、ウィーン分離派の建築家に対し、ライトがアメリカまたはシカゴの新進建築家とみなされていたことが伺える。また、武田五一による編集により、日本においてライトの作品集²¹⁾が出版されるのは、遠藤の卒業から2年後の1916年である。その前書きによれば、武田がライトから原本を贈られたのは、1913(大正2)年来日の折で、前述のように、ライトは林とも会っている。

3-2 序章について

1) 聖書の引用と平和の祈り

本稿では、遠藤の卒業論文中、‘Preface’(以下、序章)について考察する。そこには、設計のための具体的な着想や方法に先立って、遠藤自身の建築理念の萌芽が読み取れるのではないかと思う。

冒頭に新約聖書のルカの福音書の一節が引用されている。卒業論文が遠藤にとって真剣な取り組みであったなら、その精神世界を支えていたのは、直接的にはキリスト教であったといえるのではないだろうか。遠藤は、東京帝国大学入学後まもなく、富士見町教会(東京都千代田区)において洗礼を受けた²²⁾。当時下宿していたYMCAの宿舎に出入りする牧師の話にあたたかさを感じたのが切掛けだったという。そして、聖書に親しみ、集会に参加するようになる。そこで知り合った人々の中には、後に社会貢献への理想を共有し、設計依頼を受けることになる羽仁吉一・もと子夫妻や、専門は異なるが帝国大学の先輩であった星島二郎などがいた。

一方、林愛作は、長い滞米生活を開始した頃にはすでにキリスト教に入信していた。林とのこの共通点もまた、ホテルにとって本質的に何が大切かという遠藤の自問自答を、聖書に求

めることを促したかもしれない。

聖書からの引用部分は、以下の通りである。

“And she brought forth her firstborn son, and wrapped him in swaddling clothes, and laid him in a manger; because there was no room for them in the inn.”²³⁾”

「彼女は最初の男の子を出産し、産着にくるんで飼い葉桶に寝かせた。なぜならば、宿屋には部屋が無かったからである。²⁴⁾」

クリスマスと共に世界中で親しまれているイエスキリスト誕生の場面である。この引用から、まず、遠藤の視線は、ホテル(hotel)ではなく宿屋(inn)に注がれていることが注目される。帝国ホテルのモデルは、ヨーロッパにおける貴族や富裕層の社交と宿泊のためのいわゆるグランドホテルであった。一方、遠藤は、欧米文化の根底をなす聖書に遡ることによって、そのようなホテルとは対照的な、一般の人々のための宿屋を対象としている。

ルカの福音書では、適切な部屋が無い場合は、宿泊客は聖家族であっても馬小屋の中で、誕生したばかりの幼子は救世主であっても飼い葉桶の中で一夜を過ごさねばならない。後のキリスト教徒が、もし、その場に居合わせたならば黙認できない事実であろう。建築家を志す遠藤であれば、なおさらではないだろうか。冒頭の引用には、たとえ誰であろうと人々に宿泊してもらい宿屋には、適正な数の適切な部屋を本来どのように準備すべきなのか、という問いが重ねられているように思う。

次に、遠藤は、‘Peace all over the world!’(世界に平和を!)と続け、あたかも牧師の説教を想起させる。遠藤が誕生した1889年、戊辰戦争(1868-69)や西南戦争(1877)は収束していた。続く日清戦争(1894-95)、日露戦争(1904-05)において、遠藤の世代は、それぞれ、6歳と16歳の多感な時期に勝利に湧く日本を経験している。しかしながら、日露戦争以降、日米の外交関係は、日本からの移民や中国大陸の権益をめぐって次第に悪くなっていた。一方、帝国ホテルに関してみると、林は滞米生活が長く、その林が招聘を決めた建築家ライトもアメリカ人であった。

遠藤が論文を書き上げたのは、1914年6月であると自ら記している。その月の下旬に起こったサラエボ事件を知った後、筆を置いたかどうか不明である。いずれにしても、ヨーロッパの情勢が緊迫度を増していることを察知し、日米関係を思いつての平和への祈りだったかもしれない。

2) 和訳による内容の整理

序章は、聖書の引用と平和への祈りの後、日本文化の特殊性へと展開、文化の違いを越えた相互理解の重要性と、そのため日本に望まれるホテルについて述べている。そして、そのようなホテルは、視覚的な形態の検討ではなく、何よりも理想(idea)と生活(life)とを人々に提供しなければならないと結んでいる。序章の内容を、文脈にしたがって①～⑤に分け、見出しを付して和訳を以下に示す。

①世界平和の方向：幾千年もの進化の果てに、ごく最近、愛と平和と戦争忌避の機運は、「いかにして世界に平和をもたらすべきか」の方向へと力強く進んでいる。豊かな平和と幸福との

持続を期待する人々が集まるハーグ(Hague)の堂々たる平和宮殿内には国際仲裁裁判所が置かれている。それは、単に世界平和の先駆けであるばかりではない。今後の世界は自ずと統合に向かいつつあるので、結果として現代の出来事について熱意ある研究が自然と行われるようになる。

②相互理解の必要性と日本文化の特殊性：その中で、日本は今後、欧米の人々の研究と批判と詮索の中心になっていくだろう。日本および日本人が、何世紀もの間、修練(discipline)と統制(control)の輝かしい歴史により完成の域にむかって自分たちの内に育て(have bred in themselves)たもの一国民性、慣習、文明、そして何よりも芸術一は、西洋人の驚嘆とインスピレーションの対象となっている。我が国を結局『おとぎの国』とする彼らの結論に沿えば、その目に映る事物は、まるで炭坑主にとっての真珠の宝物である。そのような状況なので、後の我々の幸福のための速やかな相互理解への道は遠いけれども、究極一相互理解に向かって貢献しすぎることは決して無いのだ。

③世界におけるホテルの需要：国際観光局あるいは公共および民間団体は、人々が旅をするよう鼓舞し、出来る限りの快適さと便利さを提供することを切望している。旅客は毎年増加しており、必ず1年のある時期には旅をしてホテルに滞在する。ホテルは、世界の人々にとって欠くことのできない生活の一部を形成する。

④日本に望まれるホテル：以上のような意味において、私(遠藤)は、ホテルを提案する。それは、現在の日本に不可欠なのである。日本の第一級ホテルは、いうまでもなく世界的名声を持たず、国を代表するには程遠い。しかし、現在の社会的、経済的状况を熟慮すると、ホテルとして隅々まで徹底的に機能するものをなんとかして建設するべきである。私のホテルは、進化した社会状況と多様性と旅行者数に基づいているので、明らかに存在する投資と、否応なく存在する生活様式の問題(mode of living strong & firm)を解決する。現在のホテルには、くつろいで長期滞在したいと望む欧米の人々のための客室が不足している。一方で、1階にあって一般の人々に開かれた部屋は、隔てのない相互の交流のためにあり、首都の社交の中心となる。私は、建物全体に平和な時間をいきわたらせ、騒騒しさや奇妙さはほんの僅かもないように考慮した。良いと認められるホテルの一般的な特徴であるからである。

⑤理想と生活の提供：いわゆる様式(style)と形態(form)ではなく、理想(idea)と生活(life)を提供できる私のホテルという考えを導いたと自覚するがゆえに、もし、私の作品が非常に粗末だとしても、それを私の祖国一大日本(my Fatherland・Dai Nippon)にささげることが出来れば幸せである。

3) 考察

序章における遠藤の文章は、世界の平和と共に在り続ける日本のために、自らのホテルを通じて国際的・文化的に貢献しようという熱意に満ちている。それは、近代日本が国策としてきた富国強兵や殖産興業とは全く方向性が異なる考え方であろう。

その前提として、遠藤は、②において真の世界平和と人類の幸福のために、国や文化の違いをよく知ろうとする姿勢が欠か

せないとする。また、日本は、欧米とは非常に異なる文化を持つがゆえに、欧米にとっては強い興味の対象となるという。その興味に十分応えるための長期滞在型のホテルこそ、遠藤が設計しようとするものであることが③、④への文脈から伺える。

②からは、社会、国、世界の進化という考え方やそれについての強い期待が読み取れ、社会進化論の影響と考えられる。特に、社会進化論のもとであるハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の著作は、19世紀の欧米で広く読まれていた。19世紀末の日本では翻訳もされ、明治の後半から大正にかけて日本でも新渡戸稲造(1862-1933)をはじめ多くの知識人に親しまれた。若い遠藤もその中にあったと考えられる。②から、遠藤自身は、まず世界全体が平和に向かうことこそ進化であると捉えている。しかも、日本文化、特に国民性、慣習、文明、芸術などをその輝かしい進化の成果として肯定的に捉え、決して欧米に追随する方向を採っていない。近代化が西洋化であった明治期に比べ明らかな違いがある。

さらに、遠藤は、②において、日本文化の特殊性をも説明しようとし、端的に捉えることに成功していると思う。欧米の人々にとって日本文化が稀少で魅力があるのは、日本人が、何世紀もの間修練と統制によって日本人自身の内に育て、完成の域に高めたからだというのである。当時、伊東忠太も建築史を進化論的に捉えていた。遠藤の日本文化観と、伊東の建築史観との関係についての検討は、今後の課題であろう。

また、②から、そのような日本の美術が、欧米の人々には垂涎的であるとしていることが注目される。遠藤は、その確信を林愛作から得たと思われる。林は、欧米の日本美術愛好家の興味・関心について、山中商会における美術商としての経験と、それを踏まえた帝国ホテルの支配人としての日常を通じて、林ならではの情報をもっていた²⁵⁾と考えられるからである。

特に、遠藤が林と出会った1913(大正2)年は、ライトが来日し帝国ホテルの設計を手中に引き寄せると同時に、ボストンの大富豪スポールディング兄弟(William S. Spaulding および John T. Spaulding)のために大量の浮世絵を購入した年²⁶⁾である。しかも、林とライトを繋ぎ、ライトとスポールディング兄弟を繋いだのは、ともにシカゴの銀行家フレデリック・グーキン(Frederick William Gookin, 1853-1936)であったという。視点を変えると、林にとってのライトは、ホテル建築と日本美術(浮世絵)を繋ぐ存在であり、その背後にはアメリカの富裕層から成る日本美術愛好家たちが控えていた。林は、帝国ホテルの支配人としてそこに将来の顧客を想定しつつ、学生であった遠藤に日本美術の魅力を語ったと考えられる。

さらに前年の1912年、林は、Japan Tourist Bureau(現JTB)を開設するために尽力した²⁷⁾。海外における旅行、観光、娯楽に関する調査や、欧米から日本への観光の促進などを目的とする。したがって、③の世界におけるホテルの需要については、林からの情報があってこそ書けるのではないかと思う。

また、Japan Tourist Bureauは、鉄道業者とホテル業者との関係を重視し、事務所は東京駅完成後、その構内に置かれた。移動と宿泊は、どちらも観光や旅行に欠かせない相互補完の関

係にある。一方、ホテルの設計に際し、遠藤は、本来、人間にとって宿泊とは何かという課題を自らに設定した。帝国ホテルであれば、具体的には、欧米からの賓客、要人にとってでなければならない。もし、同様に、本来人間にとって移動とは何かという課題を自らに設定したとすれば、東京駅の場合、誰にとっての駅か、という問いと向き合うことになるだろう。「東京停車場と感想」はそのような観点から書かれたと推察される。

④からは、世界に冠たる日本のホテルを実現するという自負を持って、遠藤が卒業設計に取り組んだことが分かる。そして、そのようなホテルとは、まさに、近未来に実現する新帝国ホテルであり、自分なりに取り組む対象であったと考えられる。それは、自らのホテルを「ミカドホテル」と名づけていることから伺える。「帝」(emperor)は、「帝国」(empire)と類義であり「帝国の」(imperial)に通じる。

1913(大正2)年の時点で、新ホテルの用地は正式に決定されていなかった。遠藤は、帝国ホテルから北へ約1300mに敷地を選んでいる。濠に面しており、皇居に近い(図5,6)。かつての帝国ホテルが濠を介して望めた²⁸⁾のと同様に、景観としての美点を継承し、その歴史を尊重するかのようである。

遠藤の卒業論文から16年後、帝国ホテル完成の7年後、1930(昭和5)年に開業した甲子園ホテルにおいて、林愛作は理想のホテルの条件を、日本の宿屋のサービスと、西洋のホテルの施設・設備の兼備とした、と遠藤は述べている²⁹⁾。一方、1914年の遠藤に、まだ渡米による西洋式の生活経験は無かった。卒業設計で欧米並みの施設水準を満たすために情報を集め、想像力を駆使しなければならなかったと推察される。④の「否応なく存在する生活様式の問題」はその苦心をよく表わしているように思う。同時に、生活様式に寄り添うような環境を目指す意思の表れでもあろう。また、「騒騒しさや奇妙さはほんの僅かもない」とは、襖で隣室と仕切った宿屋では避けられないプライバシーの欠如や、欧米の生活様式に添わないために奇妙にみえるインテリアデザインなどを断固として回避するという意味ではないかと思う。

そうであるならば、確かに遠藤のホテルは、様式(style)と形態(form)をいくら整えても実現できない。⑤に見られるように、生活(life)に寄り添いながら、環境または空間としての理想(idea)を提供するという考え方にたどり着くだろう。卒業論文中、現時点では空間(space)という単語を見つけることが出来なかった。しかしながら、遠藤は、④に述べるように隅々まで徹底的に機能するホテルの設計という目標を設定することによって、人間-生活-空間-形態についての理想の系を構想しつつあったのではないかと推察される。ここでも、建築計画学的視点の先取りが見られるように思う。

遠藤が世界平和から語り起こしたホテルは、④においては、欧米の宿泊客のためであると同時に、ホテルに来訪する日本人をはじめ様々な人々との社交のためのものである。しかしながら、遠藤は、そのホテルを、それらの利用者だけに限定せず、⑤におけるように、「祖国一大日本」にささげることが出来るなら幸せであると述べている。若き日の林の姿勢に³⁰⁾重なる

ものがあると思う。また、「どんなに粗末であっても」とは、少なくとも様式と形態に目覚ましいものが無くても、という意味ではないかと思う。利用客の生活に寄り添い理想の環境を提供するホテルこそが、①、②を通じて示された日本文化の理解さらには世界平和という社会の進化に貢献するというのである。

遠藤のこのような建築観と世界観は、「祖国一大日本」という語句から今日連想されやすい全体主義的、軍国主義的な論調とは、かなり異質なものであるかと思う。帝国ホテルの客層に限定するのではなく、宿泊を求める様々な人々に遠藤が漏らさず送ろうとする温かい眼差しを起点としていると思う。

4) “Written at an Inn at Henley” の引用

序章の最後に、ウィリアム・シェンストーン(William Shenstone, 1714-1763)の“Written at an Inn at Henley³¹⁾”(ヘンレイの宿屋にて記す, 1758)の一節を引用している。イギリス文学もまた遠藤の精神世界を支えてきたことを示している。帝国大学入学以前、遠藤は仙台第二高等学校で学んでいた。その時の恩師に、『天地有情』など詩人として名高く英文学者でもあった土井晩翠(1871-1952)がいる。授業内容について熱心に質問し続けた遠藤は、やがて、晩翠の自宅を訪ね、家族同然の付き合いをするようになり、その関係は生涯続いた³²⁾。

晩翠は、イギリス留学の経験もあり、遠藤が二高で学んでいた頃、トーマス・カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の“Sartor Resartus: The Life and Opinions of Herr Teufelsdröckh”(1836)の翻訳『鬼臭先生・衣裳哲学³³⁾』(1909)を出版している。このことは、遠藤とのやりとりにより大きな影響を与えたのではないかと思う。

表題を直訳すると、『仕立て直された仕立屋：悪魔の糞氏の生活と意見』となるだろう。カーライルは、衣服と、それを身に着ける人の心の在り方との関係を多角的に描写することによって、本来、衣服を身にまとうとはどういうことかという問いを投げかけている。その意図を端的に表すために、晩翠は、表題を『衣裳哲学』と翻訳したと考えられる。

また、カーライルは、衣服を言葉通りの意味に限定せず、裸の人間を覆うあらゆる存在の隠喩として用いている。したがって、衣服を他のものと取り換えてみるのが可能である。例えば、衣服から建築にスケールを上げると、本来、建築(という環境)に生活するとはどういうことかという問いを得ることになるだろう。建築家を志した遠藤の初心が見えてくるように思う。その志が高ければ、自らの対象を限定せず、さらに都市、世界へと拡げるのは自然ではないかと思う。同時に、それによって可能になる生活やそれが人の心に与える影響に、自ら志す設計の社会的な意味を見出していたのではないかと思う。

また、日本に待ち望まれた都市計画法(旧法, 1919)が、市街地建築物法(現・建築基準法)とともに制定されたのは、遠藤が卒業して5年後である。したがって、在学中においては帝都をいかに計画し整備すべきかが、建築学科における教官・学生の重要な関心事であったと考えられる。そのことも、遠藤の視野を建築から都市へと広げたのではないかと思う。

以上の2点から、遠藤は、自らのホテルが、欧米の日本文化

理解さらには世界平和に貢献するのは、首都・東京の在り方を通じてであるという考えを持ったのではないだろうか。そこに、当時は一般的ではなかったであろう‘City Hotel’という表現を表題として選んだ意図があったと思う。

“Written at an Inn at Henley”の引用部分は、以下の通りである。もとの詩と異なる箇所のみ下線を付し、()内に原文を示す。

“Who'er has travell'd (travelled) life's dull round,
Where'er his stages may have been,
May sigh to think how of he (he still has) found
The warmest welcome— (原文には無い) at an Inn.”

「人生の退屈な繰り返しを過ごしてきた人は誰でも、その旅路が何処であったとしても、ため息をつき、想い起すだろう。温かい歓迎を受けた一宿屋を³⁴⁾」

旅する時の宿泊の楽しみを詠った詩の最後の部分である。この詩全体の内容から、‘life’は、「生活」というよりも「人生」と捉えた方が適切であるように思う。そうであるならば、詩人が、「人生」に匹敵するほどの本質的で普遍的な意味を、宿屋における宿泊の楽しみに込めたことなる。同時に、遠藤が、建築設計においては「生活」を「人生」と重ねて捉えたいと願っていたのではないかと想像されるのである。

この引用から、遠藤が、ホテルではなく、最後に再び宿屋を持ち出していることが注目される。また、暖かく歓迎されることが人生においてどれだけ大切か、という点で詩人と考えを共有していることを表わすといえるだろう。つまり、遠藤にとって、宿屋において生活に寄り添った理想の環境が提供すべきなのは、温かく歓迎されたという実感なのである。それは、後々もかけがえのない記憶として、宿泊客の心を温める。

結び

遠藤新の卒業論文は、新帝国ホテルを自らが設計することを想定し、その設計理念・方法を自分なりに練り上げ、既存ホテルについての調査の成果をまとめたものである。遠藤がそれに取り組んだ頃、帝国大学建築学科では、近代化が西洋化を意味した明治期から、日本文化や構造・構法も併せて多角的に捉えようとする大正期へと、教育・研究の方向が変換する過渡期にあった。

しかしながら、遠藤の関心は、過渡期の影響というよりも、むしろ、昭和初期以降の建築計画学を先取りしているように思う。ホテルの複雑な機能の相互関係を整理し、既存ホテルの平面図を検討しているからである。それは、ホテルの役割を、様式や形態ではなく、生活に寄り添った理想の環境の提供であると捉え、自らの設計理念としていることと対応している。このことは、設計の範囲がインテリアデザインに及ぶところにも表れている。当時の建築学科の学生の中では稀少な取り組みと位置づけられる。もちろん、ヒューマンスケールにおいて、というだけでなく、表現としての実践でもある。

その実践は、敷地や建築においても同様に試みられていると

思われる。このことが、自らの視点で建築を包括的に評価する力を養うことになり、翌年、「東京停車場と感想」の発表を可能にしたと考えられる。

また、建築の本質を追求する哲学的態度は、恩師の影響、特に帝国大学時代の伊東忠太だけでなく、仙台二高時代の土井晩翠に遡ると考えられる。そして、その態度は、常に、一般の人々へ向けた温かい眼差しを伴っている。また、生活の本質を、人生に重ねるところに見出そうとしていると思う。そのような基本姿勢は、後の遠藤による「建築論」にもみられ、卒業論文がその原点と位置付けられるだろう。そこには、上京してまもなく入信したキリスト教、土井晩翠を通じてのカーライル、伊東忠太を通じてのスペンサーの影響などが考えられる。

特に、具体的なホテル業務や最新のホテルに関する情報は、主に林愛作から得たと考えられる。林の情報は、帝国ホテルの宿泊客の生活様式から、欧米における日本美術への憧憬にまで及んだのではないかと推察される。それは、伊東忠太によるのはまた別の、建築をはじめとする日本美術の捉え方を培うことになったのではないかと思う。そして、常務取締役兼支配人として再びホテルマンとなった林から招聘されて実現した甲子園ホテルの設計においても、根底をなしたと考えられる。

謝辞

遠藤新と野田俊彦の卒業論文及び卒業設計の閲覧・掲載を許可して下さった東京大学建築学科図書館に感謝申し上げます。また、遠藤の手書き英文の解読と翻訳に多大なご助力を下さった神戸学院大学名誉教授野口ジュディ先生に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 遠藤新, 卒業論文“Description on City Hotel Design”, 東京帝国大学, 1914
- 2) 遠藤新, 卒業設計“City Hotel”, 東京帝国大学, 1914
- 3) 遠藤新, 建築論 (1926), アルス建築大講座, 第4巻, 1928
- 4) 遠藤新, 東京停車場と感想 (1-5), 読売新聞, 1915.1.27-31
- 5) 遠藤新, 甲子園ホテルについて, 婦人友友 24.6, 1930.6
- 6) 遠藤新生誕百年事業委員会編, 建築家遠藤新作品集, 中央公論美術出版, 2001
- 7) 遠藤陶, 遠藤新物語 1-79, 福島工業新聞, 1993.5.17-1994.12.19
- 8) 遠藤陶, 帝国ホテルライト館の幻影 孤高の建築家 遠藤新の生涯, 廣済堂, 1997
- 9) 野田俊彦, 鉄筋混凝土構造と建築様式, 東京帝国大学, 1915
- 10) 野田俊彦, 建築非芸術論, 建築雑誌第346号 1915.10, 日本建築学会, p.714-727
- 11) 野田俊彦, 建築論, アルス建築大講座, 第6巻, 1928
- 12) 谷川正巳, 野田俊彦—日本版オットーワグナー, 建築雑誌, 1986.9
- 13) 谷川正巳, フランク・ロイド・ライトの日本—浮世絵に魅せられた「もう一つの顔」, 光文社, 2004
- 14) 武田五一編, フランク・ロイド・ライト, 建築図案集, 積善館, 1916
- 15) Frank Lloyd Wright, In the Cause of Architecture, Architectural

Record, 1908.8

16) Anthony Alofsin, Frank Lloyd Wright: The Lost Years, 1910-1922: A Study of Influence, University of Chicago Press, 1994

17) 天内大樹, 分離派建築会結成の理論的背景—初期日本建築界における「芸術」と「表現」, 美学, 第57巻4号(228号), 2007.3

18) 東京帝国大学編, 東京帝国大学氏名目録, 東京帝国大学, 1916

19) 土崎紀子, 沢良子編, 建築人物群像—追悼編・資料編(住まい学大系), 住まいの図書館出版局, 1995

20) 東京大学工学部建築学科・建築学専攻沿革, <http://arch.t.u-tokyo.ac.jp/about/history-of-our-department/>, 2017.5.30

21) 内務省神社局編, 明治神宮造営誌, 内務省神社局, 1930

22) 武内孝夫, 林愛作ノート・I-VII, 在 第13-18, 20号, 2003-2006

23) 帝国ホテル, 帝国ホテルの百年史, 帝国ホテル, 2000

24) 帝国ホテル, 帝国ホテルの120年, 帝国ホテル, 2010

25) クラウス・クラハト他, 鷗外の降誕祭—森家をめぐる年代記, NTT出版, 2012

26) トーマス・カーライル, 土井晩翠訳, 鬼臭先生衣裳哲学, 大日本図書, 1909

27) Gospel of Luke 2, King James Version

28) Written at an Inn at Henley, <http://www.bartleby.com/270/1/12.html>

29) 黒田智子, 建築の芸術性についての考察—遠藤新と野田俊彦による「建築論」の比較をめぐって, 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 57, 2017, vol.101, No.1250 1986.9, 日本建築学会, p.553-556

注釈

1) 参考文献1)

2) 参考文献6), p.4

3) 遠藤については参考文献3), 野田については参考文献10)

4) 遠藤新と共に, 建築は芸術であるとする瀧澤真弓(1896-1983)と蔵田周忠(1895-1966), 建築は芸術ではないとする野田俊彦と山崎静太郎(楽堂として著名, 1885-1944)の5人である。

5) 参考文献10), 「建築非芸術論の続」は建築雑誌360号, p.706-710に掲載

6) 参考文献4)

7) 参考文献12), 17) p.75, 下1.11-14

8) 参考文献7), 遠藤新物語14, 1993.8.18

9) 参考文献7), 遠藤新物語12, 1993.8.2

10) 参考文献20)

11) 参考文献21), p.20, 22

12) 参考文献7), 遠藤新物語15, 1993.8.23

13) 参考文献12)

14) 参考文献4), 東京停車場と感想 (1) 1915.1.27

15) 参考文献7), 遠藤新物語14, 1993.8.18

16) 参考文献7), 遠藤新物語14, 1993.8.18

17) 参考文献4), 東京停車場と感想 (2) 1915.1.28

18) 参考文献7), 遠藤新の三男陶氏によれば, 遠藤新物語14, 1993.8.18において, 「建築関係の雑誌の中に「フランク・ロイ

ド・ライト」の作品を見つけ・・・(中略)・・・『建築雑誌』大正3年6月号にライトが紹介されている」とあるが, 確認できなかった。参考文献8), p.16では, 「かつて「雑誌でみた」と語っていたことから・・・(中略)・・・海外の出版物からではなかったか」との記述がある。

19) 参考文献15)。または, 参考文献16), p.1-3より, 'Western Architect'(1911.12)など。アメリカ版Wasmuth Portfolioに付されたパンフレットは, Seymour社からの出版である。ユニティ教会外観, クーンレイ邸インテリア, ダナ邸外観の透視図が掲載されている。

20) 参考文献16) p.35, ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ (Joseph Maria Olbrich, 1867-1908) は, ウィーン分離派の建築家として知られていた。すでにヴァスマート社から作品集を出版していたが, ライトがヨーロッパに来る前年に亡くなっていた。

21) 参考文献14) 「建築図案集解説」において, 武田は, 「大正2年(1913)に来日したにライトから日本美術への感謝の意をとって贈られた図集から32葉を抜粋した」と記している。「贈られた図集」とは, "Aus Gefürte Bauten und Entwürfe" (Wasmuth, 1911)と考えられる。ライトが帝国ホテル設計のために林と会い, スポールディング兄弟のために浮世絵を購入した年である。

22) 参考文献7), 遠藤新物語13, 1993.8.9

23) 参考文献27)

24) 翻訳は筆者による。

25) 参考文献22) 帝国ホテル支配人としての活躍は, 「林愛作ノートI」(在13号, 2003), p.2-4, 山中商会での仕事については, 「林愛作ノートIII」(在15号, 2004), p.32-33

26) 参考文献13), p.141, 142, p.165

27) 参考文献22) 林愛作ノートI (在13号, 2003), p.4

28) 参考文献23), p.68, 参考文献24), P.19

29) 参考文献5)

30) 参考文献22) 林愛作ノート・II (在14号, 2003), p.36, 上1.6-10, 「私は, 言葉によって立つのではなく, 行為によって立つキリスト教徒でありたいのです。もし私の生き方が一握りの地の塩であり光であることが証明されるならば, 私は幸せを感じるでしょう。」これを書いた時, 林は23歳であった。

31) 参考文献28)

32) 参考文献7) 遠藤新物語11, 1993.7.26

33) 参考文献26)

34) 翻訳は筆者による。

*表題の英文表記について; 遠藤新自身は卒業論文, 設計共に'Endou'を用いているが, 本稿では一般的表記である'Endo'を用いている。

図・表出典

図1 参考文献1) より 東京大学建築学科図書館の許可による

図2 同上

図3 参考文献2) をもとに筆者作成

図4 参考文献2) をもとに筆者作成

図5 参考文献1) をもとに筆者作成

図6 図1参照

表1 東京大学建築学科図書館閲覧資料より筆者作成

表2 参考文献1) より筆者作成